

# 京極読書新聞 <第26号>

発行日 平成23年 9月 1日(木)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 京極中学校図書館に新しく入ってきた本

新しい校舎の、新しい図書館。そこに、今、新しい本がどんどん入って来ようとしています。本の選定にあたっては、小中学校の先生たちと湧学館が連絡を取り合って、なるべくそれぞれの図書館の蔵書構成が似たような構成、ありきたりな構成にならないよう心がけています。子どもから大人へ。その大人がまた子どもを生んで、育ててゆく。発達段階のそれぞれの場で、成長にとって必要な本が必ずその図書館には備わっている、そんな京極の町をめざしているのです。中学校の図書室にも、湧学館の蔵書とは、また一味ちがった本が集まっています。その中の、ほんの一部ですが、紹介してみましょう。(新谷保人)

### ●日本国語大辞典(全14巻)

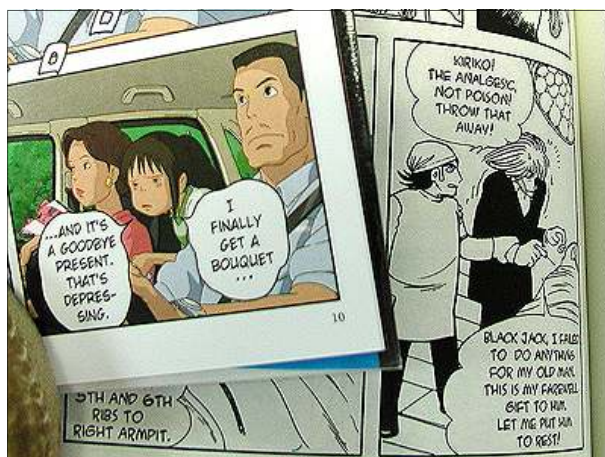
「国語辞典」と言われて、皆さんはどんなものをイメージするでしょうか？ カバンにも入る一冊本でしょうか。今回、国語辞典は2種類のもが入って来ました。一つが岩波書店の「広辞苑」。同じ一冊本でも、なんとまあ厚い国語辞典なんだとびっくりすることと思います。収録されている言葉は24万語。でも、こんなことで驚いてはいけません。今回は、それをも遙かに超える「50万項目」「100万用例」の国語辞典が入ってきたのです。

それが、小学館の「日本国語大辞典」。14冊が集まって、ひとつの「国語辞典」を成しています。まるで百科事典！今回は「総合百科事典・ポプラディア」も入ってきていますから、両者を見比べてみてください。「日本国語大辞典」のけた違いの凄さを実感されると思います。

「日本国語大辞典」が優れているのは、その用例です。小学館は明言していませんが、この辞典は、それぞれの「ことば」が初めて使われた文章を「用例」に持ってきています。ですから、例えば、「情報」という言葉はいつ頃から使われだしたのだろう？(やはりテレビやパソコンが普及してきた時代からだろうか?)と思って「日本国語大辞典」をひいてみると…用例のトップバッターに、なんと森鷗外の「藤袴絵」という小説が出てきます。もう明治の時代に「情報」という言葉はあったんだ！しかも、発明者が森鷗外とは！こういった面白い発見がいっぱいの「日本国語大辞典」です。中学校に在る間に、一度は手にとってみてください。



京極読書新聞は  
毎月1日発行です。



### ▲英語版コミック

「Miyazaki's Spirited away (千と千尋の神隠し)」  
「Black Jack vol. 1(ブラックジャック)」

### ●英語版コミック

「となりのトトロ」「千と千尋の神隠し」などのジブリ作品。「ブラックジャック」に「はだしのゲン」。日本が生み出したマンガ名作が、英語のセリフで初登場です。湧学館でも欲しいけれど、やはり、中学校が先かな。どんどん読んでくださいね。

でも、どうして、アメリカン・コミックって、セリフを大文字で書くんだろう？(読みにくくないのかな?)昔、大学図書館に勤めていた時、アメリカ人教授が、これと全く同じ手書き字体で読書推薦文を書いてきたことを思い出しました。カッコいいんですかね…

他にも、池澤夏樹編集の「世界文学全集」など、紹介したい本がいっぱいあるのですけれど、それはまた別の機会に。

## 後志シネマ散歩 第4回 男はつらいよ 旅と女と寅次郎

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

「フーテンの寅さん」には何の思い入れもないので、私が「男はつらいよ」シリーズについて何か書くのは僭越かもしれませんが…ただ、この、昭和58年のシリーズ第31作「旅と女と寅次郎」だけは別です。この作品には、なんと「京極駅」が登場するのです。これは書かないわけにはいきません。

【あらすじ】風のむくまま気の向くまま寅さんは出雲崎に現れる。港で出会った娘とひよんなことから漁船に乗って佐渡島へ渡ることになった。民宿に泊まり佐渡の風光を楽しむ日々。何か思い悩む娘は気ままな寅さんの旅暮らしに憧れる。彼女は京はるみという有名な演歌歌手、旅公演の途中に失踪していたのだ。プロダクションは大慌て。寅さんも娘が大歌手と気がついたがとぼけて佐渡の休日をつき合う。やがて追っ手が来る。「行きたくない」「大勢のファンが待っているんだろ」舞台へ戻るはるみを寂しく見送る寅さん。  
(VTR解説より)

「京はるみ」役は、もちろん演歌の女王・都はるみ。ギネス級のロングランシリーズ「男はつらいよ」の中でも、歌手がメイン役を演じたのは、たぶん、この一作だけではないでしょうか。かなりの異色作です。劇中でも、京はるみ(都はるみ)はばんばん歌います。浜の漁師さんたちとかけあいで歌う「佐渡おけさ」の場面には、私もちょっと感じ入ってしまいました。こんなミュージカル仕立ての「寅さん」映画があったなんて本当に驚きです。



だが、しかし…映画は、佐渡島からいつものお約束、葛飾柴又へとテンポよく展開してゆくのですが、だんだん不安にもなってきます。この映画のどこに「京極駅」が出てくる必然があるのだろうか？ なにか、観る映画のタイトルを間違えてしまったんじゃないだろうか…

結論から先に言いますと、「京極駅」は出てきます。それも、とても重要な意味を持って。以前、木下恵介監督の「喜びも悲しみも幾年月」の時に、小樽・祝津の日和山灯台が持っている意味(夫婦がめぐってきた幾つもの灯台を象徴的にあらわしたものを)を紹介しましたが、今回の「京極駅」も、それに近いかもしれない。

フーテンの寅さんが歩きまわった昭和の日本。いくつもの、いくつもの町。降り立った、いくつもの、いくつもの駅。なにか、そういう寅さんの人生を鮮やかに象徴するかのような「京極駅」のたたずまいではありました。もう、この映画の中でしか「京極駅」に会えないんだ…という現実がいつその哀れをさそいます。



### 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京極町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

